

「蛇性の姪」における雄黄について

相 馬 真理子

一、はじめに

『雨月物語』の一編、「蛇性の姪」は、風雅を好み仕事をしない青年豊雄と美しい蛇女真女子の悲恋を描く。一度は相愛になったものの、真女子の正体が蛇であることを知って他の女性富子と結婚した豊雄を恨む真女子は、夜、富子に憑りついて「私を遠ざけようとするならば、紀州の山々がどれほど高くても、あなたの血を峰から谷へ流しかけますよ」と豊雄を脅す。これを恐れた人々は蛇退治を試みる。以下は、脅された豊雄が義父母に相談してから一度目の蛇退治を行うまでの場面である。

かくて閨房ねやを免れ出のがて庄司にむかひ、「かうくゝの

恐しき事なり。これいかにして放さけなん。よく計り給へ」といふも、背うしろにや聞らんと声を小やかにしてかたる。庄司も妻も面おもてを青くして歎きまどひ、「こはいかにすべき。こゝに都の鞍馬寺の僧の、年く熊野に詣づるが、きのふより此向岳の蘭若に宿りたり。いとも驗なる法師にて凡疫病妖災蝗などをよく祈いのるよしにて、此郷の人は貴みあへり。此法師請へてん」とて、あはたゞしく呼よびつげるに、漸やして来りぬ。しかくゝのよしを語れば、此法師鼻を高くして、「これらの疊物まじものらを捉とらんは何の難かたき事にもあらじ。必静まりおはせ」とやすげにいふに、人く心落こがめあぬ。法師まづ雄黄をもとめて薬の水を調じ、小瓶に堪へて、かの閨房ねやにむかふ。人く驚隠おどかくるゝを、法師嘲あざわらひて、「老たるも

童も必ずそこにおはせ。此蛇只今捉て見せ奉らん」としてすゝみゆく。閨房の戸あくるを遅しと、かの蛇頭をさし出して法師にむかふ。この頭何ばかりの物ぞ。此戸口に充滿て、雪を積たるよりも白く輝く。眼は鏡の如く、角は枯木の如く、三尺余りの口を開き、紅の舌を吐て、只一呑に飲らん勢ひをなす。「あなや」と叫びて、手にすゑし小瓶をもそこに打ちすてゝ、たつ足もなく、展転びはひ倒れて、からうじてのがれ来り。人くゝにむかひ「あな恐し。崇ります御神にてましますものを、など法師らが祈奉らん。此手足なくば、はた命失なひてん」といふく絶入りぬ。人く扶け起すれど、すべて面も肌も黒く赤く染なしたるが如に、熱き事焚火に手さすらんにひとし。毒氣にあたりたると見えて、後は只眼のみはたらきて物いひたげなれど、声さへなさでぞある。水灌ぎなどすれど、つひに死ける。これを見る人いよゝ魂も身に添ぬ思ひして泣惑ふ。

豊雄は義父の庄司に、真女子が富子に憑りついて恨み言を述べたことを相談し、靈驗あらたかと言われている鞍馬寺の僧に退治を依頼するが、鞍馬僧は真女子の力に敗れて

命を落としてしまう。この場面は、鞍馬僧が鼻高々、自信満々でやってきたにもかかわらず、大蛇を見るとあつさり降参し、みつともなく逃げ出すという滑稽さもある場面だが、それまで都風の優雅な女性として描かれてきた真女子が大蛇の本性を現して人の命を奪う残酷さを見せる、恐ろしい場面である。この後、道成寺の法海和尚が芥子の香の染み込んだ袈裟と呪文によって調伏し、真女子は地中に埋められる。そして、豊雄は事なきを得る。

この場面の中において雄黄という薬品が出てくることに注目したい。「蛇性の姪」は中国白話小説「白娘子永鎮雷峰塔」の翻案であり、許宣と白娘子の悲恋を描く翻案元においても白娘子退治に失敗する場面雄黄が使われる。しかし、その中で雄黄を用いるのは蛇取りを職業とする人物である。秋成はなぜ、僧侶である鞍馬僧に仏教の力ではなく薬品を使わせたのだろうか。本稿では、この疑問をもとに、鞍馬僧が雄黄を用いて失敗することについて考察する。

二、雄黄という薬品

雄黄は硫化砒素であり、毒物である¹。硫化砒素は蛇頂石という名で、実際に蛇避けに使われていたこともある²。雄黄に関する記述は、古くには『続日本紀』からみられ、

二十八日、近江国をして金青を献らしむ。伊勢国は朱沙・雄黄、常陸国・備前・伊豫・日向の四国は朱沙、安藝・長門の二国は金青・緑青、豊後国は真朱。³ という記述があることから、顔料として利用されていたことがうかがえる。また、『延喜式』『典藥寮』の「諸国進年料雑薬」には伊勢国が雄黄四斤を献上していた記述がある⁴ので、薬としての利用もこの頃からあると思われる。正倉院薬物にも納められており、『種々薬帳』には記載されていない帳外薬物ではあるが貴州産⁵と思われる高さ六十一・三ミリメートル、経肥大部三十八ミリメートルの卵形に整形された雄黄が昭和二十三年の調査で見つかっている⁶。

『本草綱目』（慶長十二年伝来）における記述のうち、主治の項目には寒熱、惡瘡、目痛、腹痛、風邪などの他に、あらゆる蟲毒を消すことや邪氣を払うこと、蛇虺の毒を消すことが書かれている。発明の項目には、雄黄は百毒を消すことができ、百邪を除き、蟲毒を消すこと、人がこれを携えていれば鬼神が近づかないこと、山林では虎や狼は身を隠すこと、雄黄を携えて山林に入るなら蛇をおそれる必要はなく、もし咬まれても雄黄を少しつけば治ること、雄黄を焚くと蛇は遠く去っていくことなどが書かれている

7。これらの記述から、『本草綱目』において雄黄は蛇避けに効果があるとされていたことがうかがえる。

『医説』（万治二年和刻）は巻六の「中毒」の項目の中に「誤飲蛇交水⁷」、巻七の「奇疾」の項目の中に「飲^テ水得^レ疾⁷」、同じく巻七の「蛇蟲獸咬犬傷」の項目の中に「被^テ毒蛇⁷傷⁷」「辟^テ蛇毒⁷」という、蛇による病を雄黄で治療する話が載せられている。「誤飲蛇交水⁷」は谷で川の水を飲んだところ腹痛が起こり、医者がその水が蛇の交わった水であったと診断して雄黄を飲ませると赤蛇が数匹出てきた話、「飲^テ水得^レ疾⁷」は周廣という医者が黄門の腹中に咬龍がいることを見抜き、消石と雄黄を飲ませて鱗のある小さなものを取り出すと、それは翌日龍となった話、「被^テ毒蛇⁷傷⁷」は毒蛇に傷を被つて既に昏困していた人に、老僧が五靈油一兩と雄黄半兩を酒で調合したものを流しかけると息を吹き返し、薬の滓をかけると苦しみは全く無くなり、老僧は蛇毒にはこの薬を用いれば効かないことではないと言った話、「辟^テ蛇毒⁷」は雄黄が蛇毒を避けると聞いて、雄黄を買って絹の袋に入れ、寢室の四隅に掛けておいたところ、ひと月あまりして黒い液体が滴ってくるようになったので、承塵に穴を開けて見ると大きな蟒蛇が死んで腐っていた話である。また、「蛇⁷蟲⁷所^レ傷⁷」におよそ

蛇傷や虫に咬まれた傷は大藍汁一碗、雄黄の粉末に二銭を調合して傷につければ神験があり、藍がなければ靛花、青黛でも良いことが記されている⁹。「飲_テ水_ヲ得_レ疾_ヲ」と同様の話は『医談抄』や『太平廣記』にも載せられている¹⁰。

『備急千金要方』（万治二年和刻）には、漢の時代に疫病が流行して多くの人が死んだとき、書生の丁季廻が「雄黄円」という薬を人々に渡すと、それを飲んだ人は皆病が治り、市中にいた数百余りの疫鬼は薬を見て逃げ出し、鬼の王も書生に命乞いをした話がある。鬼を追い払う道法を教えてほしいと言う人々に、書生は道法などは使っておらずただ雄黄円という薬を見せただけで、この薬を持っていれば虎や狼、蛇、虫を避けることができると答える¹⁰。

近世の医学書や本草書などにも雄黄と蛇についての記述は多い。『類編廣益衆方規矩備考大成』（元禄十年刊）には蛇が交わった水を飲んでしまった時には雄黄を服用すれば良いことが書かれている¹¹。『普救類方』（享保十四年刊）や『救急方』（天保四年序）には蛇に噛まれたら生姜汁に雄黄の粉末を溶いて付けると良いことや、蛇を避けるには雄黄を身につけると良いことが書かれている『此君堂薬方』には雄黄を含む「人馬平安散」に「朝夕にかぐと一切の悪氣去り心氣をさわやかにする。唐人皆腰に下げてときどき嗅

いで不祥を避けている」とする記述がある¹²。また、『妙薬手引草』（天明三年刊）には諸々の毒虫獣に咬まれた際に付ける薬の中に雄黄が含まれている¹³。さらに、『広恵濟急法』（寛政元年序）には蝮蛇に咬まれた時や蛇が人の耳や口、鼻、肛門、婦人陰門に入った時などに雄黄を用いることその他に、薬店にあることが注に書かれているので、人々の手に入る薬品であつたことがうかがえる¹⁴。以上より、複数の書物に記載されていることから、当時、雄黄は蛇に効果があるとされていたことがうかがえる。

三、「蛇性の姪」における雄黄

雄黄が蛇に効く薬品であるとされていたことについては確認できた。しかし、「蛇性の姪」において雄黄はその薬効を発揮しない。雄黄を用いようとして退治に失敗するという設定は翻案元と同じではある。だが、退治しようとする人物の職業は蛇取りから僧侶へ変更しておきながら、雄黄はそのままだとしたということは、雄黄というモチーフには秋成の何らかの意図が込められているように考えられる。

翻案元では、雄黄が用いられる場面はどのように描かれているのだろうか。「白娘子永鎮雷峯塔」において雄黄を用いて蛇退治に挑もうとする人物は、蛇取りの戴先生であ

る。白娘子の正体が大蛇であることを知った許宣と義兄は、蛇取りの名人とされる戴先生に蛇を捕まえてくれるよう依頼する。戴先生はそれを引き受け、雄黄を一瓶用意し、許宣が身を寄せている義兄の家に向かう。家に着くと人間の姿の白娘子が応対し、この家に蛇はいないと言って戴先生を帰そうとする。しかし、仕事の依頼を受けたからと戴先生は帰ろうとしない。根負けした白娘子が捕まえられずに逃げ出してしまうでしょうと言うが、戴先生は先祖代々蛇取りをしているのだから蛇の一匹くらい難しいことはないと言き下がない。そこで大蛇の姿を現して襲い掛かると、戴先生は驚いて倒れ、そのはずみで雄黄の薬瓶も壊し、大慌てで逃げ出してしまう。

鞍馬僧の描かれ方と比較すると、雄黄を用いることの他に、退治に挑む前は自信を持っていること、大蛇を見るなり逃げ出してしまうことは共通している。また、戴先生の「量道一條蛇有何難捉」という蛇の一匹を捕まえるくらい難しいことではないとする発言と、鞍馬僧の「これらの蠱物らを捉んは何の難き事にもあらじ。」という発言は酷似している。しかし、職業は蛇取りから僧侶に変更されており、大蛇を恐がる人々を嘲る描写は鞍馬僧のみにみられる。また、戴先生は何とか逃げ出せるのに対し、鞍馬僧は

命を奪われてしまう。そして、許宣は戴先生に「家中有一条大蟒蛇」と家の中に大きなうわばみが一匹いることだけを伝えており、戴先生は大蛇の正体が妖怪であることを知らないまま退治に向かうが、鞍馬僧は「蠱物」という言葉を使っていることからその正体が単なる蛇ではないことを知っているのは明らかである。つまり、翻案元では蛇取りを生業とする人物が蛇を捕まえるために蛇に効く薬品を持つていくのに対し、「蛇性の姪」では靈驗あらたかと評判の僧侶が妖怪退治のために蛇に効く薬品を持つていくのである。

ところで、「白娘子永鎮雷峯塔」には戴先生の他にも白娘子に挑み、捕まえられずに逃げ出す人物がいる。終南山の道士である。道士は寺の前で薬を売ったり符水を配ったりしていたところ、通りがかった許宣の頭上に黒気が立ち上っていることに気付く。妖怪がついているに違いないと思った道士は許宣に護符を与え、夜に焚くよう指示する。許宣は白娘子が眠っている隙に焚いてみるが、何も起こらない。符を焚かれたことに気づいて妖怪ではないかと疑われたことに腹を立てた白娘子とともに、翌日道士を訪ねると、道士は私の符を飲めばどんな妖怪でも正体を現すはずだと改めて符を書くが、やはり何も起こらない。道士は

怒った白娘子の奇術によって宙吊りにされてしまい、地面に下されるなり飛ぶように走って逃げていく。

道士は雄黄を使うことはしないが、出家して修行を積んだ身であることや、危害を加えられていることは鞍馬僧と共通している。また、正体が妖怪だと分かっている点も共通している。戴先生と鞍馬僧の間には無い共通点が道士と鞍馬僧の間にあることから、鞍馬僧は雄黄を使わなくても良かったように考えられる。しかし、鞍馬僧は道士と同様に護符などを用いる力を有していながら、蛇取りの戴先生と同じく雄黄という薬品を使って退治に臨むのである。

では、「蛇性の姪」において鞍馬僧はどのように描かれているだろうか。事情を聞くと僧は鼻を高くして「これらの蟲物らを捉んは何の難き事にもあらじ」と自信満々で述べる。そして、恐がって隠れようとする人々を嘲るという嫌味な態度をとり、高慢にも「此蛇只今捉て見せ奉らん」と述べる。しかし、大蛇を見るなり転がるように逃げ出し、「あな恐し。崇ります御神にてましますものを、など法師らが祈奉らん」と言って死んでしまう。始めは「何の難き事にもあらじ」と蟲物を軽んじておきながら、実際にそれに向き合うと「崇ります御神」と訂正している。また、薬品である雄黄を準備していたが、真女子に敗れた後は「など

法師らが祈り奉らん」と仏教の力に頼ろうとする発言になっている。真女子を見る前と後では、蟲物に対する態度が大きく変化していることが分かる。「崇ります御神」の姿を見て、それに対して畏れを抱くが、時すでに遅く、軽んじた罰として命を奪われてしまう。

蛇に対して蛇に効果のある薬品を使うことは理にかなっている。前述したように、当時、雄黄は蛇に効くとされていた。しかし、雄黄は真女子に効かない。「かの蛇」と表記されているように、鞍馬僧の場面において真女子は蛇には違いないのだが、秋成はその薬品の効果を真女子に対し否定した。それは、真女子が「蟲物」「崇ります御神」でもあるからである。「蟲物」と認識しているにもかかわらず、鞍馬僧はそれに対する畏れの感情を見せず、薬品で立ち向かっていく。仏道修行を積んだ人物が、仏教の力ではなく、薬品の力によって妖怪に立ち向かうとするのである。そして、無様に逃げ出そうとするも、死をもって罰せられる。以上より、秋成が鞍馬僧に護符ではなく雄黄を持たせたのは、蟲物は畏れなくても薬品で対処できるとする、合理的で、畏れを知らない人物を否定する場面を描きたかったからではないかと考えられる。

四、おわりに

秋成晩年の随筆『胆大小心録』の中には以下のような文章がある。

儒者と云人も、又一僻になりて、「妖怪はなき事也」
とて翁が幽霊ものがたりしたを、終りて後に恥かしめ
られし也。「狐つきも癩性がさまぐ」に問答して、おれ
はどこの狐じやといふのじや。人につく事があらふも
のか」といはれたり。是は道に泥みて、心得たがひ也。
狐も狸も人につく事、見るく多し。又きつねでも何
でも、人にまさるは渠が天稟也。さて、善悪邪性なき
が性也。我によきは守り、我にあしきは崇るなり。狼
さへよく報ひせし事、日本紀欽明の巻の始にされる
たり。神といふも同じやうに思はるゝ也。よく信ずる
者には幸ひをあたへ、怠ればたゝる所を思へ。仏と聖
人は同じからず。人体なれば、人情あつて、あしき者
も罪は問ざる也。此事神代がたりにいひたれば、又い
はず。

中村幸彦氏はこの「儒者」とは中井履軒を指すとしてい

る¹⁵。秋成が幽霊話をしたら、履軒は「妖怪は存在しない」、「狐憑きなど是有り得ない、すべて癩性病みが狐が憑いたように話すのだ」と、憑き物の正体は病だとして幽霊話を嘲った。それに対し、秋成は狐や狸が人に憑くのはよくある話であり、動物が人に報いる話は『日本書紀』にも出ていることをもとに、信心深い人には幸いを与えてくれ、信心怠る人には災いをもたらすのだ、と反論している。

秋成は妖怪や狐憑きの存在を肯定し、その正体を病であるとして否定する履軒を批判している。薬品によつて神に立ち向かうとして失敗し、罰を受ける鞍馬僧の場面に、秋成は薬品に頼ることと神への畏れを失うことに対する批判や警鐘を込めたのではないだろうか。雄黄を用いようとする鞍馬僧は、「白娘子永鎮雷峯塔」の戴先生に比べて高慢な性格へと変更されている。「これらの靈物らを捉んは何の難き事にもあらじ。」と述べて雄黄を用意するのは、妖怪や靈物より薬品の持つ力の方が上であると過信した態度である。

履軒は『水哉子』で「恠しむは可なり、之を畏るは非也」と述べて、理解しがたい不合理なものごとへの畏怖を否定した。また、履軒やその兄竹山から強く影響を受けた山片蟠桃は『夢の代』に「神仏化物もなし世の中に、奇妙不思

議の事はさらなし」という歌を残し、超越的な存在を否定した。『論語』にも「怪力乱神を語らず」とある。しかし、「神仏化物」といった儒学者が語るまいとしたものを、国学者の秋成は積極的に語ろうとしているのである。

今回は薬品を中心に考察したが、履軒ら儒学者の無鬼論などをふまえた考察については今後の課題としたい。

【注】

- 1 森村謙一「古典自然物の研究」(『東方學報』京都第八四冊 二〇〇九年三月)では As_4S_3 、益富寿之助「正倉院薬物を中心とする古代石薬の研究」(『生薬学雑誌』十一卷二号 一九五七年十二月)では As_2S_3 、鶴月洋「雨月物語評釈」(角川書店 一九六九年)では As_2S_3 となっている。ふたれにせよ、強い毒性を持つことに変わりはない。
- 2 上村六郎「蛇頂石(じゃちょうせき)」について、雄黄と蛇毒について(『大阪女子学園短期大学紀要』第三号 一九五九年六月)。
- 3 『新日本古典文学大系 続日本紀一』(岩波書店 一九八九年)。
- 4 虎尾俊哉校注『神道大系古典編十二 延喜式(下)』(神道大系編纂会 一九九三年)。
- 5 渡邊武「正倉院薬物が語ること」(『日本東洋医学雑誌』第五十一卷四号 二〇〇一年一月)では華北産とされている。
- 6 益富寿之助「正倉院薬物を中心とする古代石薬の研究」(『生薬学

雑誌』第十一卷二号 一九五七年十二月)。

7 李時珍『本草綱目 上冊』(商務印書館 一九八六年)。

8 福田安典『医説 伝承文学資料集成第二十一輯』(三弥井書店 二〇〇二年)。

9 李昉等撰『校補本太平廣記』(中文出版社 一九七二年、美濃部重克『医談抄 伝承文学資料集成第二十二輯』(三弥井書店 二〇〇六年)。

10 孫思邈撰、林億等校『孫真人備急千金要方』(万治二年刊本)。

11 浅見惠、安田健編『妙薬奇覧・妙薬奇覧拾遺・類編廣益衆方規矩備考大成 近世歴史資料集成 第四期十一卷』(科学書院 二〇〇二年)。

12 浅見惠、安田健編『救急方・萬方重寶秘傳集・懷中備急諸國古傳秘方・薬屋虚言断・寒郷良劑・此君堂薬方 近世歴史資料集成 第二期十一卷 民間治療(四)』(科学書院 一九九五年)、浅見惠、安田健編『普救類方 近世歴史資料集成 第二期八卷 民間治療(一)』(科学書院 一九九一年)。

13 浅見惠、安田健編『耳順見聞私記・袖珍仙方・奇方録・漫游雜記薬方・農家心得草薬法・妙薬手引草・掌中妙薬奇方 近世歴史資料集成第二期十卷 民間治療(三)』(科学書院 一九九六年)。

14 浅見惠、安田健編『美年岡白牛酪考 白丹砂煉法 広恵濟急方 近世歴史資料集成 第二期九卷 民間治療(二)』(科学書院 一九九〇年)。

15 『日本古典文学大系 上田秋成集』(岩波書店 一九五九年)。

『雨月物語』『胆大小心録』は中央公論社版『上田秋成全集』から引用し、句読点、濁点、送り仮名等は適宜補い、旧字体は新字体に改めた。「白娘子永鎮雷峯塔」は中村博保、雷定平「『警世通言』「白娘子永鎮雷峯塔」試訳（二）」（『静岡大学教育学部研究報告（人文・社会』第三十七号 一九八六年）、『警世通言』「白娘子永鎮雷峯塔」試訳（二）」（『静岡大学教育学部研究報告（人文・社会』第三十八号 一九八七年）から白話文を引用し、訳も参考にした。

（立教大学大学院博士前期課程）